北海道国際理解教育研究協議会　会報

第45号

平成１１年１１月２４日

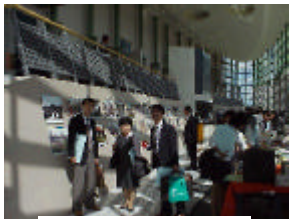
北海道国際理解教育研究協議会 事務局編

＜巻頭言＞

広く世界に目を開き，未来を切り拓く児童生徒の育成

北海道国際理解教育研究大会
北見大会実行委員長　　関　　全
（北見市立光西中学校長）

全体会



全体会場

授業風景：小学校

第２０回北海道国際理解教育研究大会北見大会は，全国海外子女教育国際理解教育研究大会，並びに，北海道海外教育事情研究大会を兼ねて去る9月１７・１８日の2日間にわたって，北見市において開催されました。全道各地から，幼，小，中，高の参加者２９０名を迎えて，くるみ幼稚園・三輪小学校・光西中学校・北見藤女子高等学校を授業会場に，北見市芸術文化ホールを研究協議・講演会場として開催し，無事終了することができました。

網走管内での全道大会開催は，平成２年の網走市に次ぐ開催であり，以後，９年間の本研究の積み上げを基板に２１世紀に向けての教育課題を視野に入れながら研究成果を発表することとなりました。また，本大会は，北海道国際理解教育研究協議会における第６次研究の初年度に当たり，その研究の具現化を求めて，「広く世界に目を開き，未来を切り拓く児童生徒の育成」を研究主題として設定しました。本管内研究会では，「網走管内教育推進の基本理念とめざす姿などの地域性を関連づけて，『共生の心を培い地球市民として歩む力を育てること』」を副主題に，幼稚園から高校までの各段階における指導の在り方を求めて課題解決の方向性を追究し，『理解から行動する力を育む』ことに重点をおいて実践化を図り大会主題に迫ることとしました。

研究の具体化にあたり，本管内国際理解教育における従来の基本目標の見直しを経て，６つの基本目標にまとめることにより新たな研究の指針を得ることができました。さらには，この基本目標の達成をめざして，国際社会で地球市民として歩むために，『自己の確立』と『共生の心を培うこと』の2つを重要な資質としてとらえ，授業での実践が図られて学校での多様な授業の展開を見ることができました。具体的には，くるみ幼稚園では，カナダ出身の常勤講師を迎え，ゲームを取り入れながら英会話設定保育の実践，三輪小学校では，『学級活動』『社会』の授業にカナダや中国出身の講師を招き，異文化理解と人権意識の涵養を図った実践，光西中学校では，『美術』『数学』『英語』の授業で平和を愛する心・異文化理解・コミュニケーション能力の育成を主とした実践，北見藤女子高等学校では，『英語』の授業で日常の習慣が地球環境に結びつくことを取り上げ，国際貢献への態度を養う実践を公開しました。

さらに，全道各地から，各教科における指導に加えて「総合的な学習の時間」へのアプローチを含めた各種の提言が発表され，地域社会における国際理解教育の在り方をも含めた研究が交流されました。記念講演では，『異文化の理解－インドと日本』と題して，Anil Panganti氏による比較文化の考察や日本の教育について，ユーモアを交えながら大変流暢な日本語を駆使しての講演がなされました。アジアから世界を見る視点を持って，世界の動きの中に自分自身の生き方を据えて活躍されている様子が生き生きと語られ，国際理解教育に多くの示唆を得ることができました。

本大会が，理念に留まることなく実践的な教育を推進する新しい風となり全道各地へ発信し，次年度の胆振大会へ引き継がれて，国際化が進展する北海道の教育振興に結び付くことを祈念申し上げます。

最後に，道研究協議会のご支援をはじめ，教育関係団体・会場校の先生方のご協力と本研究会会員各位の精力的な取り組みに心から感謝し，お礼を申し上げて大会終了の報告といたします。

各地区の
研究概要①

渡島地区研究の歩み

渡島地区研究部

1. 渡島地区研究主題

「国際理解教育の望ましい在り方を求めて」
～地域や学校の特色を生かした国際理解教育～
平成元年度（改訂）

2. 研究主題設定の理由

本会は，研究主題を「望ましい国際理解の在り方」の解明を志向し，長年にわたり継続して研究を積み重ねてきた。

国際社会に貢献する日本人の育成をめざす教育の在り方，現在の国際社会に心豊かにたくましい子どもの育成をめざし，各学校の実態を踏まえ地域に根ざした国際理解教育の在り方を追究していくものとする。

3. 研究内容の視点

時々刻々と変化する国際社会情報を踏まえ，児童生徒に国際社会において，「生きる力」を育成するという新学習指導要領の基本的なねらいを軸とし「豊かな人間性や社会性，国際社会に生きる日本人としての自覚」，「自ら学び自ら考える力の育成」，「基礎基本の確実な定着を図り，個性を生かす教育の充実」等に迫る内容である。

4. 具体化にあたって

会員一人一人が，これからの子どもたちの教育に携わる教師として，新しい時代への教育に向け，先見性と方向性を見極め，確固たる信念をもって国際理解教育におけるリーダーシップを発揮し，真に児童生徒中心の国際教育の実践に努めなければならない。

そのためにも，時代の要請を受け，自校の特性や地域の実態に即した創意に満ちた国際理解教育の改善構想をともに交流しながら実践を積み上げていくことが期待される。

＊上記は，去る１１月２日に開催された平成１１年度渡島国際理解教育研究大会における会長あいさつ「小さな実践から大きな夢の実現」に基づいて，まとめたものである。

各地区の
研究概要②

5. 道徳実践授業（平成１１年度渡島国際理解研究大会公開授業から）
◇期　日　　平成11年11月2日（火）
◇会　場　　渡島支庁　上磯町立石別中学校
◇授業者　　教諭　長田修一

「地域の方から学ぼう」
～シベリア抑留体験から考える～

◇題材名　　「シベリアの抑留体験から学ぶ」

◇授業の主張

⑴　国際理解教育の課題　～　「理解」から「違いを乗り越える」指導へ
日本は他の国と比べて問題が顕在化していると言われている。今現在で見れば世界的に見て自立度が高いためであろう。しかし，未来に活躍する子どもたちは「違いを乗り越える」指導が必要になってくる。

⑵　子ども・地域に応じた授業を開発すべきである
「違いを乗り越える」ために，考え方や習慣の違う外国の方々をたくさん受け入れたり，海外に出ていけばいいのか，というとそれは現実的ではない。もっと子どもや地域の実態に合った授業を日常的に行う必要がある。子どもたちが身につけなければならないのは，対人感覚や社会感覚，自然感覚などの「感覚」だからで，これは継続的体験でなければならない。

◇授業の視点

⑴　地域の人材活用
シベリア抑留体験者であるＰＴＡ会長 渡辺さんからシベリア抑留体験の話を聞く。身近な人の中にも学ぶべき貴重な体験をした方がいることを知るのによい機会である。また，このあと地域のお年寄りとの交流行事にもつながりが深い。

⑵　シベリア抑留問題
授業者とのインタビューと生徒の質問によってその体験が語られていく授業スタイルをとった。（指導展開）

⑶　多面的に
戦争はどちら側が善で，どちら側が悪かという一面的な捉え方をさせないように多面的に平和教育を行って行くべきだと考える。その一実例としての授業である。

＊紙面の都合で指導案等を提示できないが，抑留中に手作りされた器や娯楽に使われた手作り品の話等は，生徒の予想を超えるものもあり，大変充実した授業となった。人生の先輩として尊敬の念を抱き，互いに深く知り合うことができた。また，生徒もさまざま意見を交流し合うことができた。

各地区の
研究概要③

上川管内国際理解教育研究協議会

1. 本会の研究概要

⑴ 研究推進について

・子どもの「異文化とのかかわり」に注目し，国際社会に生きていく「人間としての生き方」を考えていく研究を進めています。

研究主題
「**広く世界に目を開き，共に学び共に生きる児童生徒の育成**」
研究の重点
「**生き方を学ぶ国際理解教育**」

研究内容１　「自分と世界のかかわりを見いだす，身近な素材の教材化
研究内容２　「自ら問題解決し，実践化していく学習活動の構成」
研究内容３　「地球市民としての認識を深める総合的な学習」

本会の前研究では，めざす子ども像に基づき，「何が育つのか」「何を育てようとしているのか」という資質や能力の育成を図る実践研究を行ってきました。また，いつでもどこでも誰にでもできる国際理解教育の実践をということから，身近な教材とのかかわりを検証してきました。

その成果と課題から，自分と事象・他人の中に違いを違いとして認め，互いに尊重する態度や共生の心を育てる必要性があげられました。それは「生き方」を学ぶ場としての国際理解教育の重要性ということになります。一方，授業を構想する際には，身近な教材から自分と世界のかかわりを見いだし，多様な文化や存在を確認しながら共に生きていくことを学んでいくことになります。

本研究では，異文化とのかかわりに着目し，人間としての生き方を問う研究を進めています。「共生の心」を持った子どもたちが地球市民という立場で，どう問題を見い出し，働きかけ，解決していくかという問題解決の過程に注目しています。

⑵ 取り組みの具体化について

・研究主題に基づき教育実践を行い，授業公開や実践交流会，学習会を実施しております。
　＊本年度の授業公開（11月中に予定～旭川市立北都中学校）
　　視　点　　研究内容３　「地球市民としての認識を深める総合的な学習」から
　　内　容　　第１学年：「世界を語る会」
・本会では，旭川市教育研究会国際理解教育部会や，上川管内教育研究会の各地区（名寄・士別・中央・富良野地区）国際理解教育班との実践交流を進めています。

各地区の
研究概要④

第 5回空知国際理解教育研究大会

平成１１年１１月12日金曜日に第5回空知国際理解教育研究大会が開催されました。当日は冷たい雨模様の天候にもかかわらず北空知，深川市立多度志中学校に空知の各地から20名近くの先生方が集まりました。

大会には，北海道教育庁空知教育局より高野和男 指導主事，道の国際理解教育研究協議会より研究部長の中村淳先生に来ていただき，適時ご助言，ご指導をいただきました。

まず10時30分より多度志中学校教諭，織田靖雄教諭の指導により，コンピュータールームにおいて中学1年，理科「地球と太陽系」の授業がありました。

本時の目標は「日本の日周運動と違う場所があることに気づかせる。」です。

授業記録より抜粋）

T:前の時間の確認をします。
C:太陽は，東の空から出て，南の空をとおり，西の空に沈む
T:じゃ，世界に目を広げた時，本当に世界のあちこちで，このような動きをするのか，自分の目で確かめてもらいましょう。（生徒12名に対し20台ほどのパソコンあり）
A:世界には200カ国近くあるので，選ぶのは大変です。そこで1人ずつ場所を割り当てたいと思います。全部で12カ所あります。

＊この後，レイキャビック，バンクーバー，テヘラン，ニューデリー，シンガポール，ニューカレドニア，ウエリントンなどを割り当てる。

T:ステラナビゲーターを開いてください。自分の場所を指定してください。都市名を開けばいいです。日付は11月12日にして，時間を朝6時にしてください。そして太陽のところをピコピコしてください。（略）

地球の動きに線を入れたいと思います。高度方位線を押して，線を入れてください。

この前と同じように，時間を追って，太陽の高さ，方角を調べてもらいます。時間は２時間ごと，6時，8時～18時まで調べてください。

＊ この後，生徒たちはノートに表を書き，時刻，高度，方角を書く。その後，マイドキュメントを開き，データを入れる。操作上で困っている生徒は個別に支援を受ける。残り10分になり，マイドキュメントに入っている結果を全員の画面に流す。
レイキャビック，シンガポールを終える。

T:はい，ニューカレドニアです。
C:わあ，すごい。あ，違う。北に行っている。
T:北という字が画面に出ているけど，ニューカレドニアは南の空を通らないんだ。はい次。ウエリントン。東の空から出て，南の空を通り西に沈むは言えますか？
C:言えません。
T：どっちの空を通っているの？C，北の空を通っている。
T:今日出したのはウエリントン等，南の空を通らないんだね。もう一つ，不思議な国が あるんだけど。今度は７月のデータを取ってみて，比べてみよう。

＊11時25分終了

授業反省から）

授業者－この授業では，南中という概念を打ち壊したかった。自身，マレーシアにいた時，生徒に言われ，ショックを受けたこともあるので。実際の目では無理なので，コンピューターを使い，シュミレーション的な使い方をした。

意見・感想

・子どもたちがそれぞれテーマを持ち，主体的な活動が見られた。今までコンピューターを取り入れた授業には偏見を持っていたが，今日の授業でそれがなくなった。私も今後取り組んでみたい。
・子どもたちの驚きの声が上がったのがよかった。理科と国際理解教育を結びつけ，いつでも，どこでも，だれでもという会の目標を見事に達成してくれた。
・コンピューターの操作について，生き生きと簡単に難しい操作をこなしており，今までの積み重ねが感じられた。

授業反省後，会として初めて空知以外の所から助言者ということで，道の国際理解教育研究協議会研究部長で

ある，札幌市立月寒小学校教諭，中村淳先生に道の国際理解教育の基本的な押えと実践例を２つ紹介していただいた。

記録より抜粋）

・国際理解教育は，子どもたちに未来への方位磁針を与えることである。
・未来に生きていくコンセプトは，地球市民，日本人としてのアイデンテイテイ，地球的視野を持つなどがあるが，具体的には次の４つに集約される。

1．共生の心
2．異文化理解
3．コミュニケーション能力
4．人間として行動できる態度。

・外国の事を知っていればいいのではなく，日本人であると同時に地球的視野を持ち，問題解決できる力をつけることが大切。知識から知恵への転換。

＊ その後，実践交流及び総合的な学習についての話題を中心に研究討議を深めました。

実践交流）

岩見沢市立メイプル小学校，加藤康徳教諭の実践紹介。２年生国語「ことばとみぶり」読み取りの後，各国のあいさつをインターネットを使って調べた実践が紹介されました。

詳しくは空知の事務局まで）

研究討議より抜粋）

・総合的な学習があるから国際理解教育をやるのではなく，国際理解教育という目標があるから総合的な学習に取り組むという姿勢が大事である。
・総合的な学習の課題は子どもにまかせるのではなく，まず何に出会わせるのかは教師の仕事。入り口ができれば，ゴールの達成の仕方はある程度学年，学級にまかせていくのがいいのではないか。
・総合的な学習は国際理解教育にとって今後大きいのではないか。今回，基礎基本を精選した結果，今日の単元は３年生に行ったのだが，今回のように１年生で広げると基礎基本はどうなるのか。今日の内容は選択理科でもできるし，それが総合的な学習の内容にかかわっていくのではないか。年間にして１００時間を超える時数があるので，年間の計画は教師が立てることになる。年間指導計画では大きなテーマがあって，小さなテーマはそれぞれ選択できればいいのではないか。
・今日の授業は12の都市を割り当てたが，それぞれ日差しの量や生活，食べ物などへ広げていくことで，総合的な学習につながるのかなと考えさせてもらいました。
・もし国際理解教育を学校として取り組むとすると，まずどんなことに具体的に取り組むのか，各教科の先生方が集まって，平場でいろいろ出し合って，膨らませることが大切。まず，できそうなものを出し合って，おおざっぱなものを作り，子どもにぶつけてみて，発展できるなら発展させ，次の年はそれを土台にできると考える。教科にこだわらないことが大切である。

今回の大会では授業にパソコンを利用して，地域から世界に視点を広げる実践や総合的な学習と国際理解教育との関連の持ち方について研究討議され，それぞれ活発な論議を展開することができました。

空知は会員の数が限られる中で，地域が広いため，実践に限らず，研究の交流についてもパソコンの利用が期待されるところです。また，研究討議の中では，総合的な学習についてもいつかは生活科のように，教科書ができ，決まった内容のものができてしまうのではないかとの 危惧も指摘されました。旧来の発想を転換し，まず教員が創造性を発揮して，子どもたちと学ぶ喜びを共有できるような実践が今まさに期待されていると実感した今回の大会でした。

８月に熊本で行われた第26回全国大会に参加する機会をえた。「21世紀を拓き，国際社会に生きる子供の育成」を研究主題に，２１世紀における教育の方向や在り方を問う研究大会になった。

大会では４つの分科会に分かれ発表が行われた。今回の分科会では，2002年の新教育課程の実施に備え，35本の発表のうち，20の発表が総合的な学習をテーマにしたものだった。帰国子女に対するレポートが２本しかなかったことと考え合わせると，国際理解教育が特別のものではなく，日常の実践から世界を見つめていくことがよりはっきりしてきた。

特に，小学校の英語教育を中心にした分科会とインターネット利用に関する分科会では，特に熱心な討論がかわされいた。「英語」「インターネット」を教えるのではなく，道具として使いこなすことで，教室を世界に開いていくという方向性がはっきり示されていた。

また，目指す子供の姿として「地球市民」がはっきり示され，これからの研究では，世界に対する理解を深めるとともに，かけがえない地球のためにどう行動していくかという実践力育成が課題であることが鮮明になった。

＝＝＝＝ 図書紹介 ＝＝＝＝

人間関係を豊かにする授業実践プラン

安達　昇　　横浜市立篠原小学校教諭
川崎　史　人　　昭和女子大中高部教諭
平井　浩　明　　練馬区立大泉第六小学校教諭
吉田　新一郎　　教員・PTA・学校サポーター

教育技術MOOK　小学館

「ミーイズム」などの言葉に代表されるように子供たちの人間関係作りの難しさが問題となっている。「自分を見つめ好きになる本」という副題が作られているこの本は，ありのままの自分を認めることから，まわりの人達との豊かな人間関係を作るための技能・態度を身につけることを目指している。

この本で紹介された５０の実践は，参加・体験型の学習方法を取り入れており，子供たちが，考え，認め合いながら，体験し，そして，参加しながら実践力・解決力が高められる内容になっている。どの実践も，１単位時間で学習が成り立つように指導案が作成されているのでとても取り組みやすい。

また，この本の実践協力者の多くは国際理解教育の実践者であり，実践一つ一つが，地球市民としての人権教育を提起しているといえる。

北 見 大 会 に 参 加 し て

北海道国際理解教育研究協議会
研究部長
札幌市立月寒小学校　　中村　淳

第20回全道大会が9月１７日金１８日土の両日，北見市において行われた。２００２年の新指導要領の実施をひかえ，総合的な学習の導入まで秒読みとなり，国際理解教育の実践が益々望まれている状況を踏まえ，全道各地から，たくさんの人々が集った素晴らしい大会となった。 特に今大会は，第6次研究の1年目にあたり，幼稚園，小学校，中学校，そして，高校おける８つの授業公開と１２本の提言をもとに，21世紀の教育の姿を追求することができた。
ここでは，北見大会の成果と大会の様子を報告したいと思う。

1，研究主題について

広く世界に目を開き　未来を切り拓く児童生徒の育成

～共生の心を培い，地球市民として歩む力を育てる指導の在り方を求めて～

2，開くから拓くへ

第6次研究では，今までの研究をもとに，「異文化」とのかかわりに注目し，「人間としての生き方」を問う研究を一歩前進させ，「共生の心」を持った子供たちが，地球市民という立場から，どう問題を見出だし，働きかけ，そして解決していくかという問題解決の過程に注目した。
北見大会では，副主題に「地球市民として歩む力」を掲げ，児童生徒一人一人に国際社会で未来を切り拓いていく資質・能力を求める授業構築を図った。このことは授業においても，子供たちに，ただ「異文化」の存在を認めるだけでなく，「異文化」を自分なりに理解し，働きかける態度を求めることになった。
例えば，小学校5年の特別活動（英語）の授業では，ALTのMR，ＡＢＳＯＬＯＮとの出会いを利用し，子供たちが，自分たちの文化（日本）とＡＢＳＯＬＯＮさんの文化の違いを理解しながらも，文化の土台となる人間の心を探る授業を公開してくれた。また，高校の英語の授業においても，環境問題を取り入れた教材を利用し，買い物袋を持参することを子供たちに求めていた。
このような授業作りのなかで，子供たちは，様々なものに対して働きかけ，学んでいく喜びを感じているようであった。
これからの研究においても，北見大会で示された，「開く」から「拓く」への研究の展開を継続していくことが，21世紀の国際理解教育の方向であることを改めて確信した。

研究の視点について

1, 子供から出発する授業へ
北見大会で強く感じたことは，どの授業も，子供の姿を見据え，地域に根差した授業であるということである。これは，小学校，中学校を網羅した「国際理解に関する実態調査」に基づく子供の実態をしっかりと捉えた「めざす子供の姿」の設定によるものと考える。 網走地区が示してくれたこのような研究の姿勢はこれからも継続されなければならないと考える。

2，コミュニケーションする子供の姿に注目
北見大会で，主張されたことに「コミュニケーション能力」の育成があげられるだろう。幼稚園から，高校まで全ての部会で英語が公開されたことからも明らかである。
この大会で示されたように，「コミュニケーション能力」は，様々な人々と問題解決するにあたり，自分の考えや意思を表現するために必要な力である。また，英語科の授業において，道具としての英語という主張がはっきりしめされたように，この能力は学習過程で友達と共に学び合うことにより，他者とのかかわりを通して育成されるものと考える。

研究の新たな方向
1, 問題解決の姿をよりはっきりと
未来を切り拓く子供たちを求めて行くためには，子供一人一人の問題解決への歩みが子供自身にも，また，共に学んでいる仲間にも明らかにされる必要性がある。歩みが具体的であればあるほど，子供自身は，地域という自分の住んでいる環境に対して働きかけを始めることになる。しかし，この姿の具体化への道は，スタートしたばかりだといえる。学校と地域の連携など，学校の枠にこだわらない実践も望まれるところである。

2，リテラシーとしてのコンピューター
21世紀を生きる子供たちを考えた時，コンピューターは欠くことができない。全国をみても，インターネットを使った実践が数多く報告されている。空知地区のように既に実践に取り組んでいるところに学びながら，国際理解教育における情報教育の在り方を示して行かなければならない。

海外からの便り

在外教育施設より

元気なお便りが

届いています！

オクトーバーフェスト開幕

ミュンヘン**日本人国際学校　森　雅彦**

この１８日に「世界最大の民族祭，オクトーバーフェスト」が開幕しました。 １０月3日までの半月間，飲んで，食べて，歌っての日々が続きます。１８日，各ビール会社のビア樽を積んだ化粧馬車がパレードして開幕，続いて１９日には，市街7ｋmを７０００人の人々が，それぞれ民族衣装をまとってパレードしました。その規模の大きさと民族衣装の美しさとともに，すべて音楽は，列の所々に挟まっているブラスバンドによる生演奏なのですからビックリします。いかに音楽人口が多く，音楽に親しんでいるかを感じます。このお祭りの起源は，１８１０年10月，バイエルン皇太子，ルートヴィッヒ１世とテレーゼ姫のご成婚を祝して始まったそうです。その場所がテレージェンヴィーゼ広場。ここは，中心部の南，札幌でいえば中島公園のようなところ。広さもそのくらいあると思いますが，ふだんは静かな空き地になっていて，30mもある 女神バヴァリア」の像が立っているだけ。それが，この半月のみビアホールのテントや遊具，そして人の波がこの広い空き地を埋め尽くすのです。日本では考えられないことですね。そこに，期間中６５０万人以上の人が訪れ，550万リットルのビールが飲まれ，60万羽の鶏の丸焼きを平らげるそうです。先日の木曜日の夕方に行ったのですが，どこも満杯，そしてジョッキを片手に語り，気分が乗ってくると椅子の上に立ってみんな歌いだします。隣とは言葉が通じなくてもすぐに仲良くなり「ツンボール！（乾杯！）」とにかく，その5000人以上はいる大テントの熱気はすごいものです。

なかなか訪れることのできないお祭りかもしれませんが，皆さんもぜひ１度訪れてみてください。

～ミュンヘン No. 7より～

デモで早帰り

日本メキシコ学院　池田 勝徳

マリアッチ　（メキシコ）

日本でもニュースで取り上げられていたようですが、ベラクルスあたりは９０年代で最悪の水害に見舞われています。日本コースでも救援物資を集めて送る予定にしています。台中日本人学校も地震で校舎が崩れたようで、今学校で募金をして送る予定です。

今週の木曜日は、デモのため子どもたちは急きょ午前授業になりました。デモというのは、ＵＮＡＭ大学での授業料の値上げに反対するものでした。学校のそばのペリフェリコという道沿いで午後２時から行われるということで、子どもたちのバス通学ルートでもあり、かなり過激の学生たちが混じっているということ、そしてＳＥＰ（メキシコの文部省）

からも子どもたちを早く返すようにと指導があったため、早帰りになりました。我々派遣教員も、子どもたちが安全に家についたかを確認するため、自分の担当のバスに乗っていきました。

聞くところによると、こういったことで早く帰るということは、年に4、5回はあるということです。去年はワールドカップがあってメキシコが決勝トーナメントまで進んだため、メキシコの試合の時は早帰りになったそうです。

勝つとメキシコ人はソカロの方に集まって大騒ぎをするのですが、そこに行くのに通学バスなどを乗っ取ろうとするのだそうです。一度、数年前に日本コースのバスが乗っ取られそうになったのですが、運転手が身を挺して守ったため、何事もなかったようですが。

ちなみに、我々はバス乗車指導のあと６時までしっかり職員会議でした。

～ E-mail メキシコ生活第２９週より～

フィエスタ（メキシコ）

死者の日 ～メキシコ生活 第３１週より～

今回は「死者の日」というお話です。メキシコにも死者を敬う習慣があり、１１月２日が「死者の日」になっています。日本でいうお盆のようなものです。死者のために祭壇を作り、その周囲に果物や花、ローソク、手料理、どくろの形をしたチョコレートなどで飾り付けをします。当然この日は休みです。

今週は、メルカードやスーパーなどでも「死者の日グッズ」をたくさん売っていました。子どもたちもいろいろな服を着て学校に登校します。日本コースの子どもたちは普通の服で来る子どもがほとんどでしたが、さすがにメキシココースの子どもたちは仮装してきていました。最近はハロウィーンと抱き合わせにしているようで、仮装もそのようなものもたくさんありました。

今年もメキシココースに招待されて集会に参加しました。４年生の子どもたちが死者の日にちなんだ劇をしたり、ビデオを見たりしました。そのあと、メキシココースのお母さんたちから、パン（死者の日用）と骸骨の形をしたチョコレート、ココアをもらって食べました。パンは、頭蓋骨や人骨をまねた小山のようなパンです。

仮装する子どもたち

ニューデリー校で行う避難訓練

ニューデリー日本人学校 加藤 和弘

私が今までの学校行事の中で一番驚いたのは，避難訓練です。日本の学校で行われる避難訓練は火事と地震を想定したものがほとんどです。しかし，ニューデリー日本人学校で行われるものは日本と全然違います。第 1回避難訓練はスクールバスの事故を想定した避難訓練でした。

子どもの生活の中で日本人の大人の目が届かなくなるのは登下校時です。ほとんどの生徒はスクールバスで登下校します。バスの中は子どもたちとインド人のドライバー，添乗員だけです。バスが事故にあったら，親や教師の助けなしで事故の対処をしなければなりません。訓練の内容は次の通りです。

◆想 定＊＊＊＊＊

バス走行時に後ろを走っていた路線バスに追突され，その衝撃で児童が頭部を負傷，バスが炎上の恐れがあるため，ドライバー，添乗員の誘導により安全な場所に避難する。

◆内 容＊＊＊＊＊

実際にバスに乗って，訓練を行います。避難のときは上級生が下級生の手を取って避難したり，声を掛けたりして，すみやかに避難させます。インドの道路ではいろいろな乗り物が猛スピードで走っているので，バスから降りたときが危ないです。逆送する車もいるので，両方をよく見なくてはなりません。インド人スタッフの演技により，バイクや車に乗りながら大声で叫んでいる人の中を，子どもたちは速やかに避難するのです。

ドライバー，添乗員の負傷を想定して，最上級生が携帯電話を使って学校へ事故の内容，負傷の状況を連絡します。実際に携帯電話を掛けさせます。最初はインド人スタッフが電話に出るので，日本人の先生が電話に出るまで，英語で会話をしなければなりません。週に2回は小学校1年から3年，週 1回は1，2年だけで下校するので，低学年だけの避難訓練も合わせて行いました。なお，携帯電話の使い方や話し方は全員に練習させます。英会話や日本語での報告内容も徹底させます。

ほとんどの保護者が参観にきます。大使館の方も参観にきます。普段は和気あいあいとしているニューデリー校ですが，この時は張り詰めた空気がただよってました。

～グルモール通信 2号より～

建国 50周年記念式典

大連日本人学校　工藤　信司

中国では，毎年決まった休日以外の特別な休日が急に決まる場合がある。先の大連市１００年の時にも９月１７日を休みにするというのが公式に発表されたのが一週間前であった。前々から，「休みになるらしい」という噂は上るものの，なかなか発表されない。前に書いたことのあるＴ小学校との交流行事の交渉で２カ月先の行事を決める習慣が無いというのもこのことからもわかる。

１０月１・２・３日が国慶節である。今年は建国５０周年にあたるため，北京ではかなり大がかりな記念行事が計画されている。この「５０周年」という特別な日に向けて，通常よりも多く休日になるらしいという噂が前々から出ていた。噂は様々で，「1週間」というものもあれば「10日間」というものもある。

大連日本人学校では，日本の休日で休みになるのが５月３日と５日しかない。あとの休日は全部授業日である。その代わりに労働節，国慶節，春節は中国の休日通りに休みになる。今回もこの公式発表を待って，国慶節の休みの期間を設定する。

結局，国慶節の休みが正式に新聞発表されたのが９月２３日であった。それによると今年の国慶節は１０月１・2・3日の三日間，さらに土日に重なった分は，その分も休みにしなければならないというお達しである。今年は１０月２日と３日が土日のため，その二日分を加えて5日 まで5連休になるということである。さらに次の日，大連市は大連１００周年を記念してさらに三日間の休みを決定した。つまり８日までの８連休である。しかし大連日本人学校では１０月８日に秋の遠足が予定されており，また授業日数の関係もあって国の休み通りの５日までが国慶節休みとなった。

１０月１日。５０周年の国慶節の日。テレビでは朝から全チャンネルで同じ映像を放送している。解説は違う局があるものの映像は皆，天安門からの中央電視台の映像である。式典そのものは日本でも報道されたのでご存じの方も多いだろう。一言で言ってしまえば，「やるときはとことんやる中国」ということになろうか。

この日，江沢民は中山装（←日本でいうところの人民服）であった。昨年，日本で天皇との晩餐会のおりに，江沢民の着た中山装が物議をかもしだしたことは記憶に新しい。世界にアピールするこの式典で着るべき服なのだから，日本へ行ったときに着ても何の不思議もないというの は道理である。

１０時ちょうどに始まった式典は，１０時８分から閲兵式になった。江沢民が天安門から中国国産の最高級車，昔の「紅旗」に乗り，約２キロも道路にずらりと整列した軍隊の閲兵を行うのである。なぜ昔の「紅旗」かというと，現在の「紅旗」はドイツのアウディーとの合弁で，完全な国産車とはいえなくなっているためである。かつてはトウ小平も同じ車に乗って閲兵式を行っている。

江沢民は車上から「同志[イ門]好（←同士の皆さん，こんにちは）」「同志[イ門]辛苦了（←同士の皆さん，ごくろうさん）」と何十回も繰り返して兵隊たちに呼びかける。それに対して兵隊たちは「首長好（←首長，こんにちは）」「為人民服務（←人民のために働きます）」と答える。見ていて気の毒になるほど型にはまっている。この時気がついたのだが，江沢民はかなり訛っている。

閲兵式のあと，江沢民はまた天安門上に戻り，各団体のパレードを見守った。これがまたすごい。最初は陸海空軍の行進である。10月２日の大連日報では新華社電として，以下の記事を掲載した。

分３０秒で歩いた。彼らは縦横斜め，どこから見ても全く乱れていない。その中でも敬礼線から敬礼を終える線までの９６mは，すべての隊がきっかり１２８歩，1分6秒で歩いた。 軍隊行進専門家によれば世界各国の軍隊の行進の場合，どんなに多くても横に２０人以上並ぶ行進はないという。今回の中国の行進は横一列が２５人である。これは世界最高である。陸海空軍の戦車，装甲車，各種爆弾でなる２５個の車両部隊は，天安門前の１００mを通過する際のそれぞれの隊の所要時間の誤差が０，２秒，距離に直せば２㎝以内であった。車両部隊の責任者の張一平は記者に「世界の閲兵式では，車両隊の行進１００mあたりの誤差０，5秒，距離で３０㎝が最高水準だ。今回の我が国の車両隊の行進は世界の最高水準といえるだけでなく，完全にトップになった」と語った』

2日の中央電視台の番組では，この軍隊の行進の際の足の上げ方を，ストップモーションを使って解説していた。行進の際に振り上げる足のつま先の高さも完全に同じになっているのである。ここまでやるために，昨年から行進要員を全国から選定し，身長，容姿などで徹底的に絞り込んだのである。そして想像を絶する特訓を行ったのだ。

そこまでやるのか，というぐらいの気合いの入れようである。行進で世界のトップになって何がうれしいのだろう，と私は思う。しかしそうは思わない人が中国にはたくさんいるということなのだろう。知り合いの中国人に「あの行進を見て，中国人としてはどう感じるの？」と聞いてみた。するとやはり「中国はすごい国だと思う。誇りを感じる」ということだった。

この式典に向けての中国の気合いは日本では考えられないものだった。日本人の感覚では異常といってもよい。 ９月の始めより，長安街（パレードを行う大通り）沿いの建物は公安により全面的なチェックを行い，危険物の有無，無い場合でも隠せそうな場所の確認とその封印を徹底的に行った。９月３０日から１０月２日まで，普段それらの建物で仕事をしている職員たちも立ち寄り禁止となり，これらの場所は全部，公安によって警備（占拠？）された。また，１０月１日当日は，携帯電話，ポケットベルを配信する電波を止め，これらを全く使えないようにした。式典の最中は一般旅客機も離着陸を行わず，空を完全に解放したのである。

そればかりではない。９月中旬より大がかりな「清場」を行った。「清場」とは，地方から北京に入ることは禁止し，すでに北京にいる地方出身者を故郷に帰すことである。得体の知れない人間はオミットという訳なのだろう。一説によると「清場」の対象者は500万にもなったという。つまりこの時期，北京中心部にいる人は，軍，共産党の関係者か，古くからの市民だけだったのである。

天安門から５００メートル離れたパレードを行う長安街沿いの貴賓楼と北京飯店では，当日は一般観光客が立入禁止になり，軍や共産党の招待客だけが泊まるようにしてあった。つまり日本からふらりと北京に行っても，この式典を直接見ることはできない仕組みになっていたのである。

この式典自体は２時間ほどで終わった。しかし天安門広場では夜１０時まで，踊りだの歌だのの出し物が連続して行われていた。それを各局で中継しているのだから，こちらもごくろうさんといえばごくろうさんであった。

広報部から
お願い

広報もインターネットで送付します

各地区の学校におかれましては，コンピュータ関連機器の整備が着々と進んでいることと思います。

本協議会でも，昨年下半期から，アドレスを取得し，インターネットによる情報交換を実施しております。在外教育施設への広報の発送につきましては，今年度，44号からすべてインターネットメールによる発送を行っております。さらに今回の４５号につきましては，WEB ファイル（インターネット情報ファイル）による発送を試行し，世界各国の会員の皆様方にもカラー判の広報をいち早くご覧いただいております。

今後もインターネットを通じて広報の発送や原稿送付の作業をより充実させていきたいと考えております。直接ファイルをやりとりすることによって，文書の誤りを防ぐとともに，作業の大きな効率化が図られます。さらには，各地区との一層の情報交流が図られる期待が持たれます。

つきましては，道内の会員の皆様にもなるべくネットを通じて広報を発送させていただく予定でおります。

メールアドレスにつきましては，厳重に管理を行い，会報の発送のみに利用しますので，皆様の登録をよろしくお願い申し上げます。

国際理解サーバー　アドレス　　登録は以下のアドレスまでどうぞ

kokusai@hokkaido.777.ac

情報をお寄せください

道内，国内，海外を問わず情報を事務局までお寄せください。

各地区における活動状況，実践報告，研究推進，各国の情報等を文書と画像も添付してお送りください。変換後，順次，広報に掲載して参ります。たくさんの情報をお待ち申し上げております。

画像添付の場合は，640 × 480 の 35万画素相当まで落としていただいても十分処理可能です。ファイル容量も少なくなり，送付時間が速くなります。

現在は在外からの情報の多くがインターネットを経由して入っておりますが，道内会員の皆様からも積極的に情報をお寄せいただきたいと思っています。

お待ち申し上げております。

ミニコラム

国際理解教育の授業像

事務局長　真木　孝輝

私がこの研究会に入ったのは，たしか１４年前ぐらいだった。その当時は，国際理解教育での授業像とは？」と問われると，ううんと唸ってしまうばかりだった。

今振り返って考えると，当時私の頭の中には，国際理解教育とはという自分なりの確たるイメージ」がなかったからである。 国際理解教育は普段行っている教科や特別活動の授業とは異なる特殊な授業でなくてはいけない」と思い込んでいたからである。

国際理解教育についての私なりのイメージが見えてきたのは，海外日本人学校に赴任して２年目の頃であった。朝，子供を現地の学校に送りに来たマレー系のお母さんが校門からいつまでもじっと子どもの姿を見送っているのを見た時，ああっ，どこの国のお母さんも思いは同じなんだ！」と感じた事が契機だった。この時以来，急にこの国の人々に親近感を覚えたのであった。その日から「この地球上に住む人間はみんな同じような悩みや希望を持って生きている仲間なんだ。決して違う人間なんかじゃないんだ！　変わらなくてはいけないのはそう見ている自分なんだ！」そう思えるようになったのであった。

以来，私は国際理解教育を殊更難しく考え，外国の人を呼んだり，国際電話をかけたりするイベント的なものを多用しなくなった。代わりに，普段の教科学習や学級経営の中でその目標を達成しながら，同時に 如何に自然に，自己中心的に考え，違いを受け入れないのではなく，違いを尊重し，共感的に相互理解する子を育てていくか」にウエイトを置くようになったのである。

国際理解教育とは，お互いの心の固いバリアを解きほぐす営みであると思っている。

北見大会より

ご意見，ご感想を
お待ち申し上げております

国際理解メールポストアドレス
kokusai@hokkaido.777.ac

王宮　バンコク（タイ）

発行：北海道国際理解教育研究協議会広報部

会　　長　　高橋　承造（札幌市立苗穂小学校長）
事務局長　　真木　孝輝（札幌市立真栄小学校教頭）
広報部長　　廣島　　直（札幌市立みどり小学校）